

ドローンでイチゴ受粉を

盛岡市と
東洋大 協定で実証実験



ドローン(左上)の飛行実験を行う澁澤教授(中央)

夏イチゴを栽培する盛岡市渋民の玉山(おしいちご園(菊地潤園長)で30日、自律飛行ドローンによる受粉作業の実証実験が行われた。動作がプログラムされた小型ドローンを飛行させ、受粉に必要

な風量が当たること

を確認した。作業の省力化やコスト削減が期待できるもので、同園

では今後、一部栽培で

同様の受粉作業を試行

し、受粉率などのデー

タを収集していく予定

である。

実証実験は、盛岡市と協定を結ぶ東洋大学(東京都文京区)による、新規就農者への経営支援の一環。同大経済学部総合政策学科の澁澤健太郎教授の主導で、IT機器を活用したスマート農業導入による経営改善を研究している。

30日は、タブレット端末からアプリで動作をプログラムできる、100g以下の小型ドローンを使用。ドローンは地上約1・5mまで上昇した後、1列目の苗の真上へ移動。列に沿って約2分飛行し、さらに2列目の真上に移動して飛行した。プログラム通りの動作が確認できた。

イチゴの受粉は、ミツバチなどの昆虫を媒介とするほかに、風で

花粉を運ぶことでも行

える。苗の上空でドローンを飛行させることで、受粉に必要な風速6m/sを発生させることができるという。

ドローンの実証実験は6月にも実施。その際は、免許が必要な100g超のドローンを手動で操作した。今回の方法では免許と操作が不要。機体も1万3千円程度と比較的安価だ。

同園では、ビニールハウス内にマルハナミツバチを放し受粉させているが、シーズンごとに15万円前後の費用がかかる上、猛暑でハチの動きが鈍れば送風機での受粉作業も必要となる。ドローンでの受粉作業が実現すれば、費用、労力いずれの面でもコスト削減が図られる。

澁澤教授は「機体が風にあおられることもなく、予想以上の結果が得られた。既成品を使っているので誰でも

導入ができ、イチゴ以外の果樹でも使用できる可能性がある。小型なのでバッテリーの持ち時間が課題となるが、どれくらいの台数で作業が完結するかなど、効率的な運用モデルを探していきたい」と手応えを得ていた。

菊地園長は「導入コ

ストも低く、自動化ともなるとさらに可能性が広がる。まずはハウス1棟でやってみて、受粉率や良品率などのデータを蓄積したい。スマート農業の道が開かれるよう、安定した結果が出てくれたら」と期待していた。

では「英気を養うことも、スポーツ、文化、

導入ができ、イチゴ以外の果樹でも使用できる可能性がある。小型なのでバッテリーの持ち時間が課題となるが、どれくらいの台数で作業が完結するかなど、効率的な運用モデルを探していきたい」と手応えを得ていた。

菊地園長は「導入コ

ストも低く、自動化ともなるとさらに可能性が広がる。まずはハウス1棟でやってみて、受粉率や良品率などのデータを蓄積したい。スマート農業の道が開かれるよう、安定した結果が出てくれたら」と期待していた。

では「英気を養うことも、スポーツ、文化、

導入ができ、イチゴ以外の果樹でも使用できる可能性がある。小型なのでバッテリーの持ち時間が課題となるが、どれくらいの台数で作業が完結するかなど、効率的な運用モデルを探していきたい」と手応えを得ていた。

菊地園長は「導入コ

ストも低く、自動化ともなるとさらに可能性が広がる。まずはハウス1棟でやってみて、受粉率や良品率などのデータを蓄積したい。スマート農業の道が開かれるよう、安定した結果が出てくれたら」と期待していた。

では「英気を養うことも、スポーツ、文化、

導入ができ、イチゴ以外の果樹でも使用できる可能性がある。小型なのでバッテリーの持ち時間が課題となるが、どれくらいの台数で作業が完結するかなど、効率的な運用モデルを探していきたい」と手応えを得ていた。

菊地園長は「導入コ

ストも低く、自動化ともなるとさらに可能性が広がる。まずはハウス1棟でやってみて、受粉率や良品率などのデータを蓄積したい。スマート農業の道が開かれるよう、安定した結果が出てくれたら」と期待していた。

では「英気を養うことも、スポーツ、文化、

持っているもので貢献

東北銀行が寄贈式 第1回のフードドライブで

東北銀行(佐藤健志取締役頭取)は30日、「第1回とうぎんフードドライブ」で集められた食品、募金をフードバンク岩手へ寄贈した。盛岡市内丸の東北銀行本店で寄贈式が開かれ、保和衛取締役常務執行委員からフードバンク岩手の阿部知幸事務局長へ目録が手渡された。

とうぎんフードドライブは、各家庭で使いきれない未使用食品や募金を取りまとめ、フードバンクや地域の福祉施設、団体などに寄贈する活動。第1回の活動に合わせ、同行従業員組合は7月1日にソフトバレーボール大会を開催した。

イベントには、同行グループ役員ら約400人が参加。食品は米やおかず、お菓子など約382kg、募金は17万7760円が集まった。

保取締役常務執行委員は「近年、日本の社会の変化の中で、収入が上がりつつある家庭が岩手にもたくさんある。物資や食料など、私たちが持っているもので貢献しよう」と、フードドライブを実施した。今後とも、少しでも地域の役に立つような取り組みをしていきたい」と表情を引き締めた。

花粉を運ぶことでも行える。苗の上空でドローンを飛行させることで、受粉に必要な風速6m/sを発生させることができるという。

ドローンの実証実験は6月にも実施。その際は、免許が必要な100g超のドローンを手動で操作した。今回の方法では免許と操作が不要。機体も1万3千円程度と比較的安価だ。

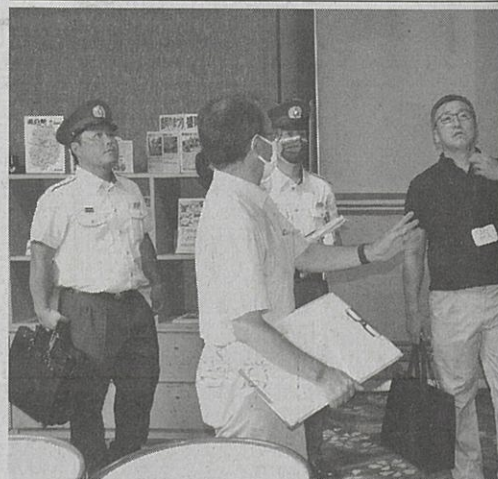
同園では、ビニールハウス内にマルハナミツバチを放し受粉させているが、シーズンごとに15万円前後の費用がかかる上、猛暑でハチの動きが鈍れば送風機での受粉作業も必要となる。ドローンでの受粉作業が実現すれば、費用、労力いずれの面でもコスト削減が図られる。

澁澤教授は「機体が風にあおられることもなく、予想以上の結果が得られた。既成品を使っているので誰でも

導入ができ、イチゴ以外の果樹でも使用できる可能性がある。小型なのでバッテリーの持ち時間が課題となるが、どれくらいの台数で作業が完結するかなど、効率的な運用モデルを探していきたい」と手応えを得ていた。

菊地園長は「導入コ

ストも低く、自動化ともなるとさらに可能性が広がる。まずはハウス1棟でやってみて、受粉率や良品率などのデータを蓄積したい。スマート農業の道が開かれるよう、安定した結果が出てくれたら」と期待していた。



愛真館で行われた防災査察

株式会社東北銀行 東北銀行従業員組合 特定非営利活動法人フードバンク岩手

第1回「とうぎんフードドライブ」寄贈式

阿部事務局長は「コロナ禍が2年、3年と

